



星空

石川達三

新潮社

星^{ほし}空^{ぞら}

昭和五十六年六月十五日 発行
昭和五十六年七月二十五日 印刷

定価 一九〇〇円

著者 石川^{いしかわ}達三^{たつぞう}

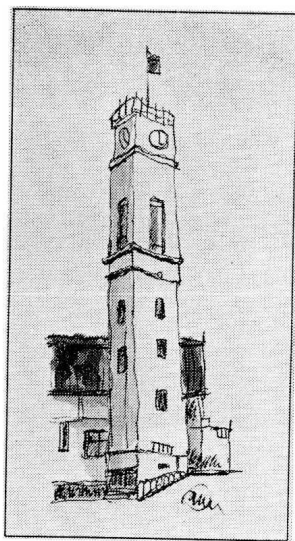
発行者 佐藤^{さとう}亮一^{りやういち}

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七二
電話 業務部東京03二六六一五一一
編集部東京03二六六一五四一一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

星
空——目次



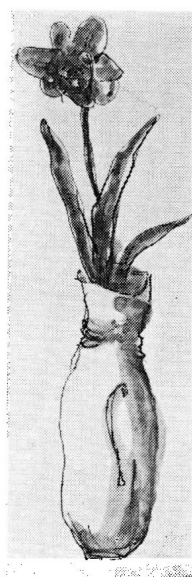
清 貧	あ との 祭 り	身 を 尽 し て も	女 は 自 由	愛 の し る し	第 二 の 人 生	苦 き 盃	弔 花	こ ち ら は 必 死	旅 に 病 ん で	靈 薬	花 冷 え	遺 児	再 会	イ ヤ ・ リ ン グ	流 浪 の 民
60	55	52	50	47	43	38	35	32	28	26	24	21	17	14	9



蝸	迎	鳥	原	判	猫	中	信	雪	今	性	帰	知	腐	貉	解
	え	類	始		と	堂			昔		京		れ	(むじな)	
牛	火	鑑	人	決	鼠	人	念	子	もの		報	人	縁		決
116	114	112	108	103	99	95	91	86	84	82	81	78	73	69	65

軍	洪	螢	入	水	不	に	弾	ど	子	非	生	空	官	嫉	捨
					俱	せ		う	わ			冷			て
政	水		籍	浴	天	の	圧	訳	か	情	業	式	僚	妬	る
170	168	166	164	160	156	151	147	144	143	139	136	130	126	122	118

天	内	谷	化	飛	寒	前	生	腐	幻	宿	兵	一	容	八	伝
網		を			い	方	物				站	粒	疑	月	説
恢		へ			正	後					宿	の	者	十	の
々	縁	だ	粧	魚	月	円	史	爛	影	命	舎	麦		五	女
222	218	215	212	208	206	204	202	200	197	193	189	185	180	176	173



星

空

流浪の民

浅草公園のあたりに浮浪者がかなり住み付いているという話を聞いて、週刊誌のルポ・ライター山岸晋吉がカメラマンの中島を訪った。所轄の警察に取材上の便宜を与えてほしいと相談すると、公園の顔役の田中さんという人を紹介してくれた。田中松介さんというのは中年のでっぱりと肥った大男で、公園付近の事ならば鼠の穴まで知っているという大変な顔役で、言葉つきの優しい人だった。

十一月八日、日が短くなって風が肌さむかった。午後七時、街の空気が酒臭くなりかけた頃から、山岸と中島は田中さんに連れられて公園へはいつて行った。

「ひとくちに言いましてあの連中は怠け者なんです、働く気が無いんです」と田中さんは言った。彼は映画館を経営していたが、定職を与える為に浮浪者を掃除人夫に雇った事も二三度あった。

「しかし永續させませんね。それに元の仲間の浮浪者が連れ戻しに来ますと、すぐにまた元の浮

ゆっくりと歩きながら田中さんは、右手の植え込みを指さして言った。

「そこに一人居るでしょう。銀紙を溜めている男です」

つつじの茂った蔭に、若い大きな男がひとり寝ていた。頭の横に煙草の銀紙を集めた丸い玉を二つ、ボール箱に入れて置いてあった。彼は郷里が水戸の向うの方で、何とかして郷里へ帰りた。そこで煙草の銀紙を拾い溜めて、帰りの汽車賃を造ろうという計画であった。その旅費を働いて造る気は全く無いらしい。立派な体格の男だった。

「どこも悪くはないんですよ。だけど働く気は無いんですよ」と田中さんは言った。「浮浪者というのは泥棒をやるだけの根性も無いんです。せいぜい他所の干し物をかつ払う程度ですな。……子供が蟬を取るも、ち、という物があるでしょう。あのも、ち、を買って来ましてね、細い竹の先にあれを塗りつけて、神社の賽銭函の中を掻き廻すと、お賽銭が着いて来るでしょう」

十円、五十円、時には百円。そういう小さな泥棒をするのが、彼等の僅かな現金収入であるというのだった。

暗い池のそばに石の地藏様が立っていて、一人の初老の男が小さな莫座の上に、地藏様と同じくらい端然と坐って、何か一心に食べていた。

「この人は新興宗教でして、毎朝何だか拝んで居ます」と田中さんは言った。その人はどういう訳か、立派な金ぶちの眼鏡をかけていた。

「夏の夜はこの浮浪者は少くなります。つまり避暑に行くんです。避暑地と言うのは隅田川の橋の下なんです。あそこは川風が大変に涼しいですからね。東京中で一番涼しいでしょうよ」

冬の寒い夜は寝る前に火を焚く。寺や神社の軒下の、雨の当たらない所を選んで、小さな火を焚いてから、その火を丹念に叩いて消す。その上に蓆を敷き、ぼろ切れを敷き、その余熱の上に寝る。彼等は着ている物はなるべく脱いで、上に掛ける。その方が暖いと言う。本人はそれで良からうが、軒下で火を焚かれるので、危なくて困るのですと田中さんは言った。

「その材木置場に一人居るでしょう。若い男ですが、足が悪いんです」

材木が沢山ななめに立て掛けてある隙間に、一人の無精髭を生やした青年がうずくまっていた。立ち上ったのを見ると、小児マヒであろうか、左足がひどく曲っていた。これではどこにも就職はできないだろうと思われた。年を訊くと二十五だと答えた。中島カメランが同情して、

「君、病氣になったりしたら、どうするんですか」と問うた。すると相手は、

「病氣の事なんか考えないんです」と、低い曇った声で淀みなく答えた。「そんな事を考えたら、一日だって生きて居られません……」

それは浮浪者の哲学みたいなものであるらしかった。聞いて見ると、いかにも尤もだという気がした。

そのあとで青年は不思議な事を言った。

「あなた方が今晚ここへ来る事は、夕方四時ごろから解っていました」

四時頃と言えばそれは山岸晋吉がまだ取材活動を開始したばかりの時間であつた。誰が浮浪者たちに情報を流したのか。彼等は警察と直結しているのであるか。

夜の空が真黒になって、天気が怪しくなっていた。浮浪者に雨は辛いはずだった。二人の探訪記者はその夜十六人の浮浪者を見た。その中に女は一人も居なかつた。それから六十歳以上と思われる老人も、なぜかひとりも居なかつた。浮浪者の生活を支える為には、或る程度の（若さ）が必要なのかも知れなかつた。

イヤ・リング

静岡県富士川の岸で生れた井上房子は、上京してからもう八年も伯母さんの店を手伝っていた。店は茶と海苔とをあきになっていた。だからその店に来る客は殆んどが奥さんか又は老人で、若い男性の来ることは殆んど無かった。房子はもう二十七になり、そろそろ婚期を逸する頃で気持にはあせりが有った。弓子伯母さんもその事を気にして、知人に縁談の事を頼んだりしてくれたが、男はいくらでも居るけれども縁談となるとむずかしいものであった。

房子はやや小柄で眼のぱっちりした、伶俐な娘であったが気むずかしい所もあって、それだけに縁談も容易なことではまともならなかった。役人はいやだとか商人はいやだとか、腹の突き出た男なんか見たくもないとか金ぶち眼鏡は大嫌いだとか言つて伯母さんを困らせた。伯母さんもしまいには匙を投げて、

「勝手にoshi。そんな事を言っていると売れ残ってしまつても知らないよ」と言つた。

郷里の富士市の叔父さんから縁談を言つて来たとき、房子はどういう訳かふとその氣になつたようであつた。相手は街の警察署のおまわりさんで、巡査部長で三十一という人であつた。警官